

開催にあてて

発想の豊かさ

Richness of Ideas

佐藤 和美¹⁾

SATO Kazumi

(2021年11月4日受理)

大量生産をするとコストは低くなる。小学生でも知っていそうな常識的フレーズである。固定費の作用により製品単位あたりコストが低くなるという、大量生産から導かれる一つの現象である。ところが、日本では、これとは逆の発想で経営を行う経営者が多い。あえて量産によるメリットを捨てるのである。何故なのだろうか。

社会は飽きることのない現象の連続である。この度は、全学研究発表大会に寄せて、一言書かせていただくので、社会科学の研究対象である「社会」の豊かな発想に満ちた様相を垣間見ることにしたい。すべての研究がそうであるように、ダイナミズムな社会の一面を、皆様の独自の視点で問う機会としていただければ幸いである。

20世紀初頭のアメリカは工業生産高でヨーロッパを抜く。これを牽引したのが大量生産だ。自動車生産において、フォードが黒塗りのT型フォードをハイランド・パーク工場のコンベアー方式のライン上で生産していた写真は興味深い。チャーリー・チャップリンが監督・脚本・出演する1936年の映画モダン・タイムスで、大量生産がブラックジョークの的になっていたことはお馴染みである。

大量生産は、標準化、分業化、連続性、流動化、機械化といった要素を統合した生産システムであり、それによって、標準的で均質な製品を安価に早く生産する。P.F.ドラッカーが産業革命と評するように、この生産方式は当時の社会へのインパクトが強く、驚き

の発想だったのである。現在社会にも発展的に受け継がれている生産方式である。そして、大量生産は製品単位あたりコストを低くする作用があるのである。

ところが、同じく、製品を量産し社会に提供する企業でありながら、日本では異なる発想が育成されていった。それは、必要なものを、必要なときに、必要なだけ生産する、すなわちジャスト・イン・タイムだ。作れる時に作りだめをすることや、部品の一括大量購入は愚の骨頂とされる。余剰となる生産・購入をしない。サプライヤーの納入協力のもと、工場内は同期化され、タクトタイム（必要なスピード）に従って製品は整然と流れる。大量生産の要素を取り入れつつ、在庫や仕掛品を持たないように生産量を抑制するのである。そのため、工程の最大稼働時と比べて単位当たりコストは上昇する。

加えて、この方式には特有のダメージがある。サプライチェーンが寸断されるやいなや生産停止に追い込まれるのである。2016年、熊本地震によりアイシン精機系列の工場が被災すると、トヨタはその影響で部品調達が滞り、国内の車両工場を稼働停止した。東北地震、新潟地震、火災、爆発然りである。ではなぜ、企業はこの生産管理方式を採用するのだろうか。それは、限りある経営資源である資金の効率的活用を図るためである。在庫は資金の滞留を意味する。このことを嫌ったのである。

企業経営の現場は創意工夫に満ちている。

¹⁾ 経営学部長

社会環境の変化に応じ、新たなパラダイムの発想が生み出される。競争の中で、多様な視点で部分最適な、豊かな発想が息づく。それらは、社会という現実の時間あるいは場の、様々な制約の中で生まれてくるダイナミズムな社会の現象である。上述の2つの事例は、豊かな発想のほんの一端に過ぎない。

これらの社会現象は、時代や地域、文化の制約を受けた「人」が発想したシステムであり、そのシステムに深く関与していくのも「人」であった。社会科学は、歴史的、社会的、文化的、人類学的等の視点を駆使して、対象が生じた意味を問い明らかにし、相対的価値を見極め、社会に提言し還元していく。こうした研究活動が、動き続ける社会の、そして人の作り上げる社会の方向性を見極める一助となることが期待される。

本学は実学教育を謳っている。社会現象に対する科学的検証を行った裏付けをもって、現実根差した学問として、様々な社会現象を学生たちに伝えることが肝要と考える。そうすることによって、学生たちが、社会現象に潜む共通性や普遍性あるいは特異性を学び、次の時代にオリジナルな新しい豊かな発想を創生していく力を蓄えていくことを心から願う。

以上